10月12日
産経新聞

日本の草創期は大阪から

関西のオペラ文化を考える
～演出家、栗山昌良と語る　―上―

日本を代表するオペラ演出家、栗山昌良が帝国ホテル大阪（大阪市北区）のチャペルで続けてきたコンサート「栗山昌良オペラノート」が今秋、開催20回の節目を迎えるのを記念し、11月25日から3日連続で記念ガラコンサートが開かれる。国内外で活躍する歌手計48人が出演する華やかな舞台は、オペラ界を支えてきた栗山への恩慕から実現。栗山とソプラノの片山弘子、関西歌劇団理事長でバリトンの井上敏典に、関西オペラ界や栗山の演出について語ってもらった。

（安田奈緒美）

日本のオペラ文化草創期に重要な役割を果たした大阪を振り返る片山弘子、栗山昌良、井上敏典の3人（左から）＝大阪市北区（松永渉平撮影）

栗山　古い話だけど戦後日本の声楽界、オペラは関西から始まったと思う。我々東京の連中は特急「つばめ」に乗って大阪に来て夜、関西歌劇団のオペラを見たものです。

井上　関西歌劇団は指揮者、朝比奈隆先生が中心になって作られたんです。

栗山　サンケイホールも大阪では戦後初の近代的なホールで東京の連中はうらやましく思っていた。名プロデューサー、橋本喜一さんがいてね、織物問屋の息子でいわゆる大阪の旦那。ホールプロデュースも旦那の感覚で。遊芸を楽しむ特有の文化が大阪にはあってオペラは大阪でなければ育たなかったのではないかな。

井上　朝日会館や大阪毎日ホールもありました。

栗山　毎日ホールで関西二期会の第1回公演「カルメン」を演出しました。

片山　市来崎のり子さんがカルメンで。

井上　エスカミーリョは木川田誠先生でしたね。

片山　木川田先生は最初関西歌劇団で歌われていたでしょ。

井上　そうです。でも一度東京の舞台で歌って朝比奈先生のお怒りをかった。当時は関西出身、関西に住むものはライバルである東京の舞台には出てはいけない、という暗黙のルールがあって。朝比奈先生のお力も強かったですし。

栗山　それは初めて聞いた。とにかく、日本の創作オペラは関西から始まった。「夕鶴」も「修禅寺物語」も大阪が初演。当時は「勤労者音楽協議会」も盛んでフェスティバルホールで2週間オペラやって毎日3千人近い客席を満席にした。本当に不思議ですよ、あれだけ盛んだったのが今こうなっちゃって。テレビが出てきてから生の舞台、劇場芸術は難しくなった。

片山　フェスティバルホールが再開して話題になっていますが。

栗山　これから先のことは正直わかりません。ただ、帝国ホテル大阪で続けられてきたチャペルコンサートは優れたプロデュースの仕事。クラシックはもともとサロンで聴かれたわけだからその状態に近い。夜は結婚式がなくて空いてるから始まった大阪らしいアイデア。札幌でいいホテルがあるんで提案してみたら乗ってこなかったね。

井上　大阪独特の文化なんですか。

栗山　とにかくここにはまだ大阪特有の、プロデュースする力が残っているんですね。

◇

コンサートは連日午後2時からと午後7時からの2回公演。全席自由3500円。☎06・6881・4650。